パプニカにできた
ギュードンヤの話
【不思議時空】

パプニカにできたギュードンヤの話【不思議時空】

藤沢みや（miya）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=14890692

ヒュンマ

最終決戦前の不思議時空でのお話。タイトル通り、ギュードンヤがパプニカ王国の王都にでき、食べに行くお話です。ほのぼの。マァムもヒュンケルも箸が使え、牛丼屋がある謎時空です。細かいことは気にしてはいけない。

パプニカにできたギュードンヤの話【不思議時空】

　◇

「マァム。おまえさん、ギュードンヤという店を知っておるか？」
　人懐っこいバダックに声を掛けられてマァムは首を傾げる。
「知らないわ」
「肉を甘辛く煮た物をメシの上にかけたご飯じゃ」
　バダックは声高にギュードンのおいしさを連呼する。全く想像のできない料理だが、彼の口ぶりでとにかくおいしいことはわかった。茶色でほかほかしていて甘辛くてライスがおいしく食べやすい。
「想像が付かないけれどおいしそうね」
　嬉しそうなバダックに、マァムも笑顔で返す。
「旨かったぞぉ。おまえさんも行ってみ」
「うん、そうするわ」
　場所を教えてもらい、マァムはほくほくと誰を誘おうか考える。楽しいことは誰かと共有したい。
　ギュードンヤ。お肉が好きそうな人……
　マァムの脳裏に浮かんだのは、なぜか銀糸の彼。

「あ、ここね！　ヒュンケルは来たことある？」
「いや」
　ギュードンヤは明るいオレンジを基調とした店だった。
　ヒュンケルとマァムの二人は店の中に入ると、バダックに教えてもらった通りにチケットを購入し、店員に差し出す。

地底魔城育ちと田舎の村育ち。
　あまり共通点がないようなヒュンケルとマァムだが、パプニカ王国の王都のようなオシャレな空間には慣れていないところは、共通項だった。
　だが、バダックに教えてもらった店は労働階級が多く、貴族が多い店のように気取っていなくて気楽に過ごせた。
　二人はぱくぱくとギュードンを食べながら、誰をこの店に連れてくるか話をする。ヒュンケルは「クロコダインを連れてくる」とぱっと見あまりわからないが嬉しそうに言い、マァムはチウたちを連れてくることに決めた。
「おいしいもの見つけたら、誰かに教えたくなるものね」
　マァムが満面の笑顔で言うのに、ヒュンケルはつい拝みそうになり慌てて箸を握り直した。

　数日後の、ある晴れた日。
「マァムさんのお薦めの店ってここですか？」
「そうよ、チウ。すみませーん。座れない人がいるので椅子を並べ替えていいですかぁ？」
　熊の隊員のために、せっせと位置を変えるマァム。
　店の前には、天気のいい日は外で食べられるようにベンチが並んでいた。パプニカ王国にいるようになってだいぶ経つが、チウたちはあまり街中で食事をすることはなかった。全員が座れるような座席がないからだ。
　だが、マァムは店員に声を掛けるとてきぱきと全員が座れるようにしてしまう。店員が物言いたげに見ていることにチウは気が付いたが、あえて口を出さなかった。ギュードンを食べてみたかったから。
　注文した品が届いてからは、マァムとチウは全員に行き渡るように、一人前の牛丼を小さい子たち用に、子供用の器を借りて器を移

し変える。
「ちっちゃいのと大きいのがあればいいのにね～」
「クロコダインさんだったら、たぶんこの五倍あっても楽々でしょうね」
　店員たちが突然現れたモンスターたちに息を呑んでいるが、少女がせっせと世話を焼く姿、彼らがお行儀よくおいしそうに笑いながら食べる姿を見て、安堵の表情を浮かべる。
「ヒュンケルがクロコダインと来るって言っていたから、店員さんに相談しておくわ。お箸も、クロコダインだったら大きなスプーンのがいいかもしれないものね」
　小さな子たちは子供用のスプーンで食べていたし、マァムとチウ以外は箸を使えていなかった。
「みんな、遠慮せずにどんどん食べろよ！！　お金ならこのチウ様がたっくさん持っているからな！！」
　大戦後に与えられた報奨金だが、彼らは結構余っていた……
　なぜなら、モンスターにとって金貨は、使いようがあまりないのだ。
「あら、じゃあ私もチウに奢ってもらおうかしら」
「ええー！　マァムさんのがお金持ちじゃないですか」
「ふふっ。冗談よ。私もみんなの分、払うわ」
　晴天の中、みんなで食べるギュードンは格別においしかった。

「おおう、ここがおまえさんの言っていたギュードンというものが食べられる店か」
「ああ、そうだ……店主、あの広い席を使ってもいいだろうか？」
　ヒュンケルは、クロコダインを見てぽかーと口を開ける店員に声を掛ける。派手なバッチを着けているから店主だと思ったのだが、合っているかはわからない。
「メニューはと……おお、オレにちょうどいいな。五倍盛りという

のがある」
「前に来た時にはなかったが……」
　ヒュンケルは首を傾げる。
　確か以前は、人間でなければ座れなさそうな椅子ばかりだったが、ベンチを二つ三つ並べたような広い席も増えていた。
　そのため、クロコダインも地面にではなく椅子に座れている。
「おまえさん、女性とのデートでここに来たのか……？」
　クロコダインは呆れた目線をヒュンケルに向ける。
「……デートではない。マァムが来たいと言うから」
　頬を微かに朱に染めて、ヒュンケルは顔を逸らした。相変わらず、この親友はピンクの髪の武闘家の少女に弱いらしい。
　しかし、愛しの少女と二人で来るのにギュードンヤとは……
（もしかしたら、オレのがお洒落な店に詳しいのか……？）
　クロコダインは人間の風習に興味津々で、レオナやマリンともよく話をしていた。デートで喜ばれる場所なども、実はヒュンケルよりもクロコダインのが詳しい。
「じゃあ、五倍盛りを十杯頼む！　スプーンは一番大きなもので頼むぞ」
「ああ、オレも今日は五倍盛りをひとつ頼もう」
　……ヒュンケルは、意外と大食いだった。
　しかし、クロコダイン目線で見ると「人間とはなんと小食なのだ」になってしまう。
　擦れ違いというのは、恐ろしい。
　ヒュンケルがチケットを購入して店員に渡すと、店員は「あぁりがとうぅござぁいまーす！」と声を上擦らせていた。

　◇

　街を歩いていたポップとダイは、ある場所で足を止めた。
「……なんかさ、このギュードンヤ……凄くないか？」

「この店だけモンスターで溢れてるね」
　モンスター達がおいしそうに牛丼を頬張る姿が遠目からもわかる。
　通りがかったダイとポップも人波に興味を惹かれて近付けば、見慣れた桃色の髪の少女に「ダイ！ポップ！」と軽やかに呼ばれる。
　見やると、マァムとヒュンケル、クロコダイン、チウと配下のモンスターたちが一緒にご飯を食べていた。
　にこにことマァムが手を振り、ヒュンケルも軽く手を上げる。
　クロコダインやチウ、モンスターたちも嬉しそうに彼らに手を振ってくる。
　カオスだ。
「なんか、スゲーことになってんな」
「ここのギュードン、おいしいのよ！」
　目を丸めて呆然とするポップに、マァムが嬉しそうに声を掛ける。
「しかも、とっても親切なの！！」
　小さなモンスター達は自分専用の器で食べていた。いつの間にか、メニューに牛丼ミニ、牛丼ミニミニというのができていたし、反対に五倍盛り七倍盛り、十倍盛りまである……この店は客の要望を聞き過ぎではないだろうか。
　ダイとポップも、この店がオープンした頃にレオナに連れられて入ったことがあるが、こんないろんな種族が混ざっている店ではなかったはずだった。
　周囲の人間もこの光景が日常なのか、誰もじろじろと見てはこない。
「おおーーい！　ワシが紹介した店で、お前さんたちだけ楽しんどるのはズルいじゃろう！！」
「おお、爺さん。ここが空いているぞ」
　クロコダインが自分の隣の席を指し示す。
「バダックさん、素敵なお店を紹介してくれてありがとう！！」
　マァムが笑顔でお礼を言うと、隣のヒュンケルも同意するように頷いている。
　その様子を見て、ポップは辟易とした顔をする。

ポップはレオナと感覚が似ていて、ギュードンよりタピオカやパフェやパンケーキのがテンションが上がるタイプなのだ。
　肉よりも、オシャレなデザート派である。
　意外と肉食な肉体派組に呆れた目線を向けている。
「ポップ！！　オレもギュードン食べたい！！」
「……しょうがねえな。俺は、期間限定のロモス王国の煮込み定食にするか」
「オレはね、五倍盛り！！」
　ポップもダイも混ざり、今日の牛丼屋の売り上げは……過去最高を示していた。

■　おまけ　■

　クロコダインは正直に言えば戸惑っていた。
　自分は邪魔ではないだろうか……と。
　バダックが『カツドンヤ』というものを知り、マァムに教え、マァムがヒュンケルとクロコダインを誘ったのだ。その場にたまたまクロコダインもいたため、気を遣ってマァムも誘っただろうと思い遠慮をすれば、二人して雨の中の産まれたばかりのキラーパンサーみたいな瞳で見てくるのだ。
　二人でデートをして欲しい。
　待ち合わせ場所の、飲食店街に近い大きな噴水の傍。ヒュンケルとマァムが楽しそうに話している。
　……やはり、オレは外した方がいいのでは……という思いも湧き上がる。
　すると、二人が同時にこちらを見やった。
　浮かぶ笑顔。
「「クロコダイン！」」
　駆け寄ってくる二人。
　嬉しそうな満面の笑顔と、はにかんだ笑顔。

……嬉しいような恥ずかしいような照れくさいようなこの気持ち。
　生まれてようやく目の開いたキラーパンサーの子供が嬉しそうに駆け寄ってくれた時の気持ち。
　頬が緩む。
「待たせたな、ヒュンケル、マァム」
　いつも笑顔でオレを迎え入れてくれる二人。ありがたいことだ。もちろん、ダイもポップもレオナ姫も自分を喜んで受け入れてくれる。
　それがなんだかくすぐったい。

　後から姫に聞いてみたら、その不思議な感情は……『尊い』と言うらしい。姫は博識だと感心したものだ。

おしまい